

## 『伊曾保物語』における教訓について

瀨田幸子

〔抄録〕

『伊曾保物語』は十六世紀後半、キリスト教の宣教師によって伝えられたイソップ寓話集の和訳本であり、国字文語体で書かれ、古活字本、整版本で出版され、一般に広く普及した書物である。この書物はイソポの伝記と寓話から成るが、寓話における教訓を、寓話に添えられた寓意から見てみると、大部分が、身近で实际的な「処世術」「処世訓」であることがわかる。また、『伊曾保物語』の伝記部にある、中巻の第一話「イソポ、子息に異見の条々」は全てが教訓であり、寓話に添えられた寓意と共通の内容のものもあるが、その中には仏教思想、儒教思想、忠君思想、孝の思想の影響を見ることの出来る部分がいくつかある。これらは『伊曾保物語』における教訓の日本化的変容といってもよいだろう。「イソポ、子息に異見の条々」を中心に『伊曾保物語』における教訓について考察する。

キーワード 『伊曾保物語』、教訓、寓意

### はじめに

『伊曾保物語』は、キリスト教布教・伝道を目的に来日した外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓話集が和訳され、国字文語体で書かれた書物である。言い換えれば西欧から日本にもたらされた最初の翻訳文学である。この『伊曾保物語』は、慶長・元和(1596～1623)年間版から寛永16(1639)年刊本まで九種の古活字本が出、その後万治2(1659)年刊の挿絵入り整版本も出て一般に広く普及している。

『伊曾保物語』の寓話は、刊行当初から、笑話を集めた『戯言養気集』(元和〈1615～1623〉年間頃)、狂言の芸談に注釈が加えられた『わらんべ草』(万治3〈1660〉年)等に引用されている。樗牛道人の『鄙都言草』後編巻下(享和2年〈1802〉年)には「伊曾甫といへる草紙」と『伊曾保物語』が紹介され、一話載せられている。また司馬江漢の随筆集『春波楼筆記』(文化8〈1811〉年)や教訓書である『訓蒙画解集』(文化11〈1814〉年)『無言道人筆記』(文化11〈1814〉年)には数話紹介されている。柴田享(陽方)の『続続鳩翁道話』(天保9〈1838〉年)にも出てくる。さらに天保15〈1844〉年刊の教訓書『絵入教訓近道』には十六話

が載せられている。このように『伊曾保物語』の寓話を引用している書物は、笑話集、芸道書、文人の随筆、教訓書と多岐にわたっているが、いずれも人を導くための書物である。その事実は、『伊曾保物語』の中の、『イソップ寓話』が本来持つ処世のための知恵や教訓が、江戸時代の諸芸の師、学者、教育者等によって、童蒙を教導する材として受け入れられたことを示している<sup>(1)</sup>。

それでは、『伊曾保物語』における教訓とはどのようなものなのだろうか。本稿では『伊曾保物語』の寓話に添えられた寓意から『伊曾保物語』の持つ教訓について考察する。

また、西欧から日本にもたらされたイソップ寓話集が、先に述べたように江戸の初期から中期にかけて広く普及し、読まれた背景には、イソップ寓話集が翻訳され『伊曾保物語』として国字文語体で出版されるにあたって、西欧的な物や思想を日本的なそれに置き換えて理解したり、またそれを表現（意識）する中で、日本的な要素が加えられていったのではないかと考えられる。それについて本稿では、一条全てが教訓でできている中巻第一条「イソポ、子息に異見の条々」を取り上げて、考察していくことにする。

## 一 『伊曾保物語』 寓話における教訓

『伊曾保物語』は、上中下の三巻から成るが、内容は前半が中巻第九条までのイソポの伝記部、後半が寓話部の二部構成である。寓話部の始まりは中巻第十条で「イソポ、物の譬へを引きける条々」という題であるが、以下の寓話部全体の序にあたる内容となっており、『伊曾保物語』 寓話部の寓話は中巻第十一条から始まっている<sup>(2)</sup>。したがって、『伊曾保物語』 寓話部の寓話数は中巻第十一条から第四十条までの三十話と下巻の三十四話の合計六十四話である。『伊曾保物語』の寓話には二話の例外を除いた六十二話に、寓話のあとに「その如く」で始まる寓意が添えられている。例外の二話とは、下巻第七条の「狼、夢物語の事」と『伊曾保物語』最終話である下巻第三十四話の「出家と盗人の事」である。例外の二話を除いた六十二話の寓意を分類してまとめたものが次頁に示す〈表『伊曾保物語』 寓話の寓意の分類〉である。

『伊曾保物語』 寓話部の寓意は、表に示したように、1「人とのつきあい方」2「自身の生き方」3「世の中の仕組み」4「人の性」の四つに大きく分類される。あとの二つが「世の中とはこのようなものである」とか「人というものはこのようなものである」といったように、世の中や人を、少し距離を置き客観的に見たものであるのに対して、先の二つは例えば「悪人には近付くな」「分相応の付き合いをせよ」あるいは「慌てず思案せよ」「我慢せよ」といった、より身近で実際的な内容である。言い換えると、「処世術」「処世訓」といってよい。そして、数の上から言うと、1「人とのつきあい方」を述べたものが、全体のおよそ三分の二、2「自身の生き方」を述べたものが六分の一強と、寓意の大部分が実際的な処世法を述べたものなのである。『伊曾保物語』の寓話の教訓とはこういった身近で実際的な「処世術」「処世訓」であったのである。そして、この身近で実際的な「処世術」「処世訓」は、『イソップ寓話集』が本

表『伊曾保物語』寓話の寓意の分類

	寓意内容		寓話(通し番号)	計
1	人とのつきあい方	1	悪人には近付くな	5
		2	分相応の付き合いをせよ	6
		3	身の程をわきまえよ	8
		4	恩を受けたら報いよ(報恩)	4
		5	人を侮ってはいけない	3
		6	親しい仲(関係)を捨ててはいけない	2
		7	人を悪く言ってはいけない	1
		8	人を騙してはいけない	1
		9	人の選り好みをしてはいけない	1
		10	軽々しく人の言葉を信じてはいけない	2
		11	悪事をはたらくと復讐される	1
		12	召し使っている者には俸給を与えよ	1
		13	相手の気持ちを考えよ	1
2	自身の生き方	1	慌てず思案せよ	4
		2	我慢せよ	2
		3	欲張るな	2
		4	勤労・勤勉	1
		5	善い顔で悪事を思うな	1
		6	人に忠告するより自分の身を修めよ	1
		7	智者の意見を聞け	1
		8	道に背いた色好みはいけない	1
3	世の中の仕組み	1	大切にしているものが自分を傷つけ、疎んじているものが助けになることもある	1
		2	媚びる者が栄え、正直者が害をうけることもある	1
		3	富み栄えても不定の雨に打たれ野辺の土になる	1
		4	臨終に至って日頃顧みなかった自分の言動が自分の味方になる	1
4	人の性	1	人は自分を省みず他人の過ちをいう	1
		2	心の曲がった人は、他人の栄えを妬み、苦しみを喜ぶ	1
		3	愚か者は自分の良い所に気付かない	1
		4	宝に目をくらませ理非をまげることが多い	1
		5	良い教えを聞いても守る者はいない	1
		6	悪人は自然には善に返らない	1
		7	人が勇敢さを誇るのは安全な所での大言壮語だ	1
		8	一度人を苦しめると、いつも「悪人」と疎んじられる	1
		9	智者の教えも、用いられないと誇示せず隠す	1
				62

来持っている処世の知恵や教訓でもあっただろう。

## 二 「イソポ、子息に異見の条々」における教訓

ところで、『伊曾保物語』中巻の第一話に「イソポ、子息に異見の条々」<sup>(3)</sup>と題した条がある。これは、イソポの伝記部の中で、自分を陥れた養子を許し、その養子にイソポが与えた十八カ条の教訓である<sup>(4)</sup>。本文を以下に示す<sup>(5)</sup>。

- 一 汝、此の事よく聞くべし。他人に能き道を教ゆるといへども、我が身に保たざる事あり。  
それ、人間の有様は、夢幻のごとし。しかのみならず、わづかなる此の身を扶けんがために、やゝもすれば、悪道には入り安く、善人には入りがたし。事にふれて、我が身のはかなき事を顧るべし。
- 二 常に天道を敬ひ、事毎に天命を恐れ奉るべし。  
君に二心なく、忠節を尽くす儘に命を惜しまず、真心に仕へ奉るべし。
- 三 それ、人として法度を守らざれば、畜類に異ならず。恣に、悪道を守護せば、則ち天罰を受けん事、蹊を廻らすべからず。
- 四 難儀出でこん時、広き心をもつて、其の難を忍ぶべし。然らば、忽ち自在の功德となつて、善人に至るべし。
- 五 人として、重からざる時は威勢なし。敵、必ずこれを侮る。然りといへども、親しき人には軽く、柔かに向ふべし。
- 六 妻女に、常に諫めをなすべし。すべて、女は邪路に入りやすく、能き道には入りがたし。
- 七 慳貪、放逸の者に伴ふ事なかれ。
- 八 悪人の威勢、羨む事なかれ。故如何となれば、上るものは、終には下るものなり。
- 九 我が言葉を少くして、他人の語を聞くべし。
- 十 常に、我が口に能き道の轡を銜むべし。殊に、酒宴の座に列なる時は、物いふ事を慎むべし。故如何となれば、酒宴の習ひ、能き詞を退けて、狂言綺語を用ゆるものなり。
- 十一 能き道を学する時、其の憚りを顧まれ。習ひ終れば、君子となるものなり。
- 十二 權威をもって人を従へんよりは、しかじ、柔かにして、人になつかしんぜられよ。
- 十三 秘す事を、女に知らすべからず。女は心はかなふして、外に漏らしやすきものなり。それによつて、忽ち大事出で来たれる。
- 十四 汝、乞食、非人を卑しむる事なかれ。かへつて慈悲を起こさば、必ず天帝の助けにあづかるべし。
- 十五 事の後に千万悔いんよりは、しかじ、事の先に千度案ぜよ。

十六 極悪の人に、教化をなす事なかれ。眼を愁ふる者のためには、ひとり、かへりて、障りとなるがごとし。

十七 病ひを治するには、薬を以つてす。ひとの心曲がれるを治すには、よき教へをもつてするなり。

十八 ⑦ 老者の異見を輕しむる事なかれ。老いたる者は、その事、我が身にほだされてなり。  
汝も年老い、齡重なるに従ひて、その事、忽ち出来<sup>しゅつたい</sup>すべし。

ここには、六十二ある寓話の寓意の中に書かれた教訓と共通の内容のものもある。「四 難儀出でこん時、広き心をもつて、其の難を忍ぶべし。」は前章の表における2「自分の生き方」の「2 我慢せよ。」と同じである。また「七 慳貪、放逸の者に伴ふ事なかれ。」「十六 極悪の人に、教化をなす事なかれ。」は同じく1「人とのつきあい方」の「1 悪人には近付くな。」と同じである。「十四 汝、乞食、非人を卑しむる事なかれ。」の意味する所は1「人とのつきあい方」の「5人を侮ってはいけない。」に通じるところがある。また、「十五 事の後に千万悔いんよりは、しかじ、事の先に千度案ぜよ。」は2「自分の生き方」の「1 慌てず思案せよ。」と同じである。

しかし、六、十三の妻あるいは女性に対する考え方や接し方（「すべて、女は邪路に入りやすく、能き道には入りがたし。」「秘す事を、女に知らすべからず。女は心はかなふして、外に漏らしやすきものなり。」）は、『伊曾保物語』の寓話には見られないものである。

さて、これらの教訓の中には、西欧の翻訳文学とは思えないような、無常観、忠君思想、孝の思想、仏教思想、儒教思想の影響を見ることの出来る部分がある。『伊曾保物語』と同じ祖本によって作られたと考えられている『イソポのハブラス』<sup>(6)</sup>にはそれがほとんど見られない。また『伊曾保物語』『イソポのハブラス』の翻訳原典と考えられているシュタインヘーヴェル本『イソップ寓話』の英訳本ウィリアム・キャクストン『イソップ寓話集』<sup>(7)</sup>にも見られない。このことは、イソップ寓話集が翻訳され『伊曾保物語』として国字文語体で出版されるにあたって、西欧的な物や思想を日本的な物や思想に置き換えて理解したり、またそれを表現（意訳）する中で、日本的な要素が加えられたためではないかと考えられる。『伊曾保物語』における教訓の日本化的変容といってもよいだろう。次に『伊曾保物語』における教訓の日本化的変容を具体的に見ていく。

〈1〉 まず、下線①「人間の有様は、夢幻のごとし。」は『幸若舞』『敦盛』<sup>(8)</sup>の「人間五十年化天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。」を受けて書かれているのではないと思われるが、仏教思想の中でも無常観が濃厚に感じられる。その後の「事にふれて、我が身のはかなき事を顧るべし。」の我が身がはかないというのも無常観であると言ってよいだろう。戦国乱世から江戸時代になったばかりの当時の日本では、世が無常であるということは一般によく言われ、『伊曾保物語』の初めの部分に加えられたのであろう。これにあたる項は『イソポの

ハプラス』にはない。この箇所について、遠藤氏は、キャクストン本の「人間ゆえ、運命に従わなければならない。」の翻訳であるとし、「神を崇めなければならない前提として人間のはかなさに言及」したとしている<sup>(9)</sup>。しかし、人間が運命に従わねばならないことと、人間の有様が夢幻のようにはないということは、全く違うことであり、『伊曾保物語』のこの部分がキャクストン本のそのままの翻訳であるとは言い難い。『伊曾保物語』の第一項の後半「それ、人間の有様は、夢幻のごとし。しかのみならず、わづかなる此の身を扶けんがために、やゝもすれば、悪道には入り安く、善人には入りがたし。事にふれて、我が身のはかなき事を顧るべし。」は翻訳者或いは編者が新たに挿入した、日本の脚色であろう。

〈2〉 次に下線②の「君に二心なく、忠節を尽くす<sup>まま</sup>儘に命を惜しまず、真心に仕へ奉るべし。」は、主君に二心を抱かず忠義を尽くし、命を賭しても主君に仕えよ、ということである。これにあたる項も『イソポのハプラス』にはない。

ところで、1232年以前に成立したとされる、藤原孝範の撰になる類書『明文抄』の二には『文選』の言葉として「夫君之寵臣。欲以除患興利。臣事君必以殺身靜亂。以功報主也。（夫れ君之寵臣は、患を除くを以て利を興さんと欲す。臣は君に<sup>つか</sup>事うるに必ず身を殺すを以て亂を靜め、功を以て主に報ずる也。）」という言葉が載せられている<sup>(10)</sup>。また、格言集である『伊達本金句集』には、「忘身奉君（身を忘れて君に奉ず）」「為臣死忠、為子死孝（臣と為しては忠に死し、子と為しては孝に死す）」という言葉が取られている<sup>(11)</sup>。このように、「君に二心なく、忠節を尽くす<sup>まま</sup>儘に 命を惜しまず、真心に仕へ奉るべし。」というのは、当時の日本では一般的な忠君思想の言葉である。キャクストン本には「王の怒りを招かぬようにせよ。」とあるが<sup>(12)</sup>、これは王にうまく取り入り、王を怒らせないようにすることとも読め、日本の忠君思想とは全く違っている。この部分は、そのまま翻訳したのではなく、王に仕えることを日本の忠君思想として理解し、ここに書き加えたのではないかと想像される。『イソポのハプラス』では、キリスト教布教のねらいから、日本の忠君思想を表す教えは取らなかったのだろう<sup>(13)</sup>。

〈3〉 下線③の「人として法度を守らざれば、畜類に異ならず。」は法度を守らなければ畜類と同じだという意味である。このような、人と畜類を対比させて、何かをしなければ畜類と同じであるというのは、『明文抄』三にも『新唐書』の言葉として「人所以異於鳥獸者。以其有仁義也。（人の鳥獸に異なる所以は、其の仁義有るを以て也。）」が載せられているように<sup>(14)</sup>、日本ではよく使われる言い方である。『徒然草』第58段にも、「人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。ひとへに<sup>むさぼ</sup>貪る事をつとめて、菩提におもむかざらんは、万の畜類にかはる所あるまじくや。」とあり、ひとへに貪ることをつとめて、菩提におもむかないのは畜類と同じであると書かれている<sup>(15)</sup>。キャクストン本のこれに相当する部分は「人間である以上、人事に関心を持て。」であると思われるが、これをそのまま翻訳したものではない。「人事に関心を持」つことを『伊曾保物語』では「法度を守ること」と捉え、そうせよと言う代わりに「守らざれば、畜類に異ならず」と、人と畜類を対比し更に反語



的に表現するという、当時の日本でよく使われた表現方法をとったのだろう。これに対して、『イソポのハブラス』の相当する項では「人は万物の靈長である」と書かれている<sup>(16)</sup>。この世界における人類の優位性を説いており、これは西欧社会のもたらした思想であるように思われる。さらに続けて「それによつて人と、万物の差別を置かずは、鳥類、畜類に同前ぢや」となっていて、「人事に関心を持」つことを「人と、万物の差別を置」くことと捉え、『伊曾保物語』とは全く違った内容になっている。ただし、『イソポのハブラス』の場合も「差別を置かずは、鳥類、畜類に同前ぢや」と人と畜類を対比し更に反語的な表現を取っているところは『伊曾保物語』と同じである。また、これに続けて『伊曾保物語』では、「<sup>ほしいまま</sup>恣に、悪道を守護せば、則ち天罰を受けん事、踝を廻らすべからず。」とあり、『イソポのハブラス』では「このやうな者には天罰遠うはあるまじい」となっていて、悪事をはたらくものには天罰が下るという意味のことが書かれている点も同じである。この後半部分は、キャクストン本にある「悪者は神が罰してくださる」を翻訳したものと考えてよいだろう。

〈4〉 下線④の「人として、重からざる時は威勢なし。」は『論語』學而篇にある「君子重からざれば、則ち威あらず。」<sup>(17)</sup>の引用であろう。『伊達本金句集』には『孟子』からしてこの言葉が取り上げられている<sup>(18)</sup>。この言葉は『天草版金句集』<sup>(19)</sup>にも『ロドリゲス日本文典』にも「君子重からざる時んば、威あらず。」と書かれていて<sup>(20)</sup>、当時一般によく使われていたことがわかる。しかしこれに相当する部分は『イソポのハブラス』には見られない。キャクストン本にも見られない。

〈5〉 第八項の初めの部分「悪人の威勢、羨む事なかれ。」は『イソポのハブラス』の「悪人の威勢富貴を羨むな」と同じ文意であるが、それに続く下線⑤「上るものは、終には下るものなり。」は『イソポのハブラス』の後続部と全く意味が違っている。これは威勢のある者がどんどん上へ上っていつてもついには下るのだということであり、『平家物語』の冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹のはなの色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏にかぜの前の塵に同じ。」<sup>(21)</sup>に似た、仏教の無常観を思い起こさせる言葉である。それに対して『イソポのハブラス』では、その前に「道理の上からで無い時は」と条件をつけ、「富貴は却って成り下がる」と金銭的には豊かであっても、心の面で「成り下がる」といっており、これは無常観ではない。キャクストン本のこれに相当する部分は「冷酷非情な者とは付き合うな。そのような者はたとえ富み栄えていても、卑しい者である。」であろう。前半の「冷酷非情な者とは付き合うな。」は『伊曾保物語』の第七項「慳貪、放逸の者に伴ふ事なかれ。」、『イソポのハブラス』の「慳貪放逸な者を友にすな」に当たる。そして、キャクストン本には『伊曾保物語』における「悪人の威勢、羨むことなかれ。」や『イソポのハブラス』における「悪人の威勢富貴を羨むな」という教訓はなく、「そのような者はたとえ富み栄えていても、卑しい者である。」と続いている。キャクストン本で一つの項目であったものが『伊曾保物語』『イソ

ポのハブラス』で、二つの項目に増やされたことになるが、内容から見ると、「富貴は却って成り下がる」といっている『イソポのハブラス』の方がキャクストン本に意味的に近いと言えるだろう。

〈6〉 下線⑥「権威をもって人を従へんよりは、しかじ、柔かにして、人になつかしんぜられよ。」は『三略』の「柔能く剛を制し、弱能く強を制す。」<sup>(22)</sup>を引いた言葉であろう。この言葉は、『天草版金句集』にも載っているが<sup>(23)</sup>、当時日本でよく読まれた兵法書の言葉である。これに相当する部分はキャクストン本には見られない。この部分について、遠藤氏は次のように述べている<sup>(24)</sup>。

この条はこのように、一家の主人の家族・家人等に対する心がまえについて述べたものである。古活字本はその主旨に一致し、天草本の方は、その主旨に合わない。そこに問題点がある。しかし、天草本の主旨に合う条を筆者は Tuppo 集・Caxton 集等に見出せないのである。天草本の場合は、編者（訳者）が古活字本祖本のみに拠り、その古活字本の場合と同じであった本文をこのように改ざんしたのではないであろうか。古活字本の場合には「家長・主人」（dominus）や「家族・家人」（familia・domestici）にあたる語は本条文中に見えない。しかし、その条文の主旨は Tuppo 集や Caxton 集等の場合と同じであると言える。天草本編者（訳者）は古活字本祖本のみに拠り、そこに「家長・主人」や「家族・家人」の意を表す語が無かったために、その内容を人間の他人に対する一般的な心がまえと解釈し、それをモラル的に見て編者（訳者）の理想とするモラルに変えたのであろうと考えられる。その結果、天草本の条文は原典から逸脱した内容になってしまったのであろう。

遠藤氏が主旨が一致しているとしているキャクストン本の箇所は、「家族に愛されたくば、面倒を見てやれ。」である。しかし、私はこの箇所について、『伊曾保物語』がキャクストン本の主旨と一致しているとは言えないと思う。遠藤氏も述べているように、『伊曾保物語』では家族のことと限定しておらず、一般に人を治める場合を述べており、キャクストン本では、家族の話であるから、やはり、『伊曾保物語』の内容が原典を翻訳したものとは言えないだろう。また、『イソポのハブラス』では「我より下の者に崇<sup>そうきやう</sup>敬せられうよりも、上たる人に諫めらるゝことを喜うで交りを為せ、」と、意味が全く違っている。

〈7〉 最後に下線⑦「老者の異見を軽しむる事なかれ。」は老者の意見を尊重せよということである。この項は『イソポのハブラス』には見られない。しかし、孝の思想が行き渡っている当時の日本では、あつて当然の教訓とも言える。これはイソポが養子に与えた教訓の最後のものである。自分を罪に陥れた養子に対して、友人に助けられ、王から名誉を回復された後で、養子を許し、そして与えた教訓であるから、老者の異見、すなわちこの教訓を尊重せよという内容は、しめくくりとしてふさわしいわけである。これに相当する部分がキャクストン本に見られないのが不思議なくらいである。おそらく原典のイソップ寓話集では、イソポが友人



に命を助けられたことに重きがあったのだろう。キャクストン本の最後は「よい友人が得られる者は幸せである。なぜなら、どんな秘密もいつかばれるからである。」で締めくくられている。よい友人というのは罪に問われたイソポを生かして王から隠し、王がイソポを必要としたときにイソポが生きていることを公表して王にイソポを引き合わせたエリミホのことを指す。そして、「どんな秘密もいつかばれるからである。」の秘密というのは、イソポの養子が王に対して、イソポが他国と手を結んでいる内容の偽手紙を見せたことを指しているのである。

ところで、遠藤氏は、この部分について次のように述べている<sup>(25)</sup>。

Caxton 集・Tuppo 集のこの条は親友を得ることの大切さについて述べているのであり、古活字本の条とは主旨が違う。古活字本の場合は老者の意見を尊重せよということを述べているのである。しかし、「親友」という横の関係が古活字本の場合では「老者と若者」という縦の関係に置き換えられていると考えることもできるわけである。古活字本の場合は古活字本祖本の編者（訳者）にこの条を最終条とするという強い意識が有って、その意識が、教訓のしめくりとしてイソポ（老者）の意見を尊重せよということをイソポがエヌウス（若者）に述べる形の改ざんしたものと考えられるのである。老者の意見を尊重せよということの理由として述べる筆者下線部「老いたる者は、その事、我が身にほだされてなり。——」には、筆者には日本的な心情が強く感じられるのである。それも、本条の改ざんに因るものではなかろうか。そうすると、天草本編者はその日本的改ざんの面を避けて、本条を採録しなかったのかとも考えられることになる。

遠藤氏は、原典で「親友」という横の関係であったものを『伊曾保物語』で「老者と若者」という縦の関係に置き換えているとも考えられるとしているが、横の関係とはイソポと友人エリミホとの関係のことであり、縦の関係とはイソポとその養子との関係のことで、縦の関係と横の関係とは全く別の人物関係であって、原典を翻訳したものとは言い難い。後に遠藤氏が指摘しているように「教訓のしめくりとしてイソポ（老者）の意見を尊重せよということをイソポがエヌウス（若者）に述べる形に改ざんしたもの」と考える方がよいだろう。しかし、この改ざんが遠藤氏の言うように、「古活字本祖本の編者（訳者）」の手になるものかどうかはわからない。

以上、『伊曾保物語』の「イソポ、子息に異見の条々」に見られる日本的な要素が加えられている箇所を七つ取り上げてみてきた。また、『伊曾保物語』では、使われている語句に注目しても、「自在の功德」「狂言綺語」「慈悲」といった本来は仏教で使われた言葉も使われている。『イソポのハプラス』と比較してみても、『伊曾保物語』の教訓には、日本化的傾向が強いということが言えるだろう。

しかし、それでは、『イソポのハプラス』には日本的な思想、日本的な付け加えが皆無であるかということ、そういうわけではない。『イソポのハプラス』「イソポ養子に教訓の条」の「天

に 躑せぐくまり、地に 躋ぬきあしする心を持て」という教訓は、もともとは『詩経』に「天を蓋し高しと謂う、敢えて局らずんばあらず。地を蓋し厚しと謂う、敢えて躋せずんばあらず（思うに天は高いといっても敢えてせぐくまり、地は厚いといっても敢えてぬきあしするのだ）。」とある言葉である<sup>(26)</sup>。この言葉は、平安時代中期源為憲によって作られた、世上に行われた諺文の出典録である『世俗諺文』<sup>(27)</sup>にも、また『明文抄』にも取られている<sup>(28)</sup>。また『天草本金句集』にも出ている言葉であり<sup>(29)</sup>、非常に恐れる様を表す言葉として『太平記』でも使われている<sup>(30)</sup>。しかし、この言葉は『伊曾保物語』には見られないのである。

## おわりに

『伊曾保物語』寓話の教訓とは、その大部分が、身近で实际的な「処世術」「処世訓」である。この身近で实际的な「処世術」「処世訓」は、『イソップ寓話集』が本来持っている処世の知恵や教訓でもあったと思われる。

『伊曾保物語』伝記部の「イソポ、子息に異見の条々」は一条全てが教訓でできているが、そこには当時の日本で一般に行われていた格言集などから採られたと見られる言葉によく似た表現がいくつもある。これは、原典の『イソップ寓話集』にあった西欧的な物の見方、考え方、思想を日本的な物や思想に置き換えて理解し、そのように表現（意識）する中で、日本的な要素が加えられていったと考えられる。他の条と違って、この条が、教訓だけで出来ているため、もともとの内容に加えてさらに日本的な付け加えがしやすかったこともあるだろう。そして、それら格言とされる言葉のものは、『論語』『文選』『三略』等であり、また『平家物語』『幸若舞』等の当時よく語られ人口に膾炙されていた言葉である。それらの言葉の底には、仏教思想、忠君思想、儒教思想、孝の思想といった、日本的な大きな流れが存在する。つまり、このように『伊曾保物語』の教訓には、西洋の思想で作られた『イソップ寓話集』に当時の日本人に受け入れられやすい日本的な付け加えが多くなされており、特に「イソポ子息に異見の条々」にはそれが端的に見られるのである。このような日本的な付け加えによって、『伊曾保物語』は刊行当初から仮名草子の一つとして受け入れられ、盛んに読まれるようになったのであろう。このような日本的な付け加えは、寓話部の他の教訓にも見られるが、それについては、また稿を改めたいと思う。

### 〔注〕

- (1) 『伊曾保物語』の江戸時代における受容については、拙稿「『伊曾保物語』と江戸時代におけるその受容」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第38号、2010年3月1日）参照。
- (2) 中巻第十条の序文的働きについては（1）を参照。
- (3) 目次には「イソポ、子息に異見の事」とある。
- (4) 区切りが違うため二十条と数える古活字本もあるが、内容は同じであるので、『万治絵入本伊

曾保物語』の本文に従い十八カ条と数える。

- (5) 本文は、『万治絵入本伊曾保物語』(武藤禎夫校注 岩波文庫 2000年)である。下線は稿者による。
- (6) キリスト教の宣教師によって伝わり、和訳されローマ字口語体で書かれ、キリシタンによって出版されたイソップ寓話集。本文は『吉利支丹文学集2』(新村出 柊源一校註 平凡社東洋文庫 1993年)所収の『イソポのハプラス』。『イソポのハプラス』の該当条「イソポ養子に教訓の条々」を以下に示す。下線は稿者による。

子に<sup>むか</sup>対うて申すは、「汝<sup>たしか</sup>慥にこの儀を聞いて耳に挟め、人に善い理を教ゆるとも、その身に守らずは、木賊の物を滑らかに磨いて、己は<sup>そきう</sup>鹿相な如くぢや。又天道の私ない事を鑑み、万事を謹み、天に<sup>せぐま</sup>踞り、地に<sup>ぬきあし</sup>踏する心を持て、人は万物の霊長であるぞ、それによつて人と、万物の差別を置かずは、鳥類、畜類に同前ぢや。このやうな者には天罰遠うはあるまじい、万事について難儀難艱出来せうず、それを心から堪忍せい、その堪忍をもつて万事悉く心に叶はうず、親しいをも疎いをも分たず、平等に、笑ひ顔を人に現はせ、妻に心を許すな、平生異見を加へい、惣別女は弱いによつて、悪には入り易う、善には至り難いぞ、慳貪放逸な者を友にすな、悪人の威勢富貴を羨むな、道理の上からで無い時は、富貴は却つて成り下がる基ぞ、我が言はうずる言葉を押し止めて、他人の言ふことを聞け、言語に邪無かれという轡を常に含め、乱れがはしうものを言ふことを本とする所では猶その嗜みに<sup>ゆるかせ</sup>怠をすな、善い道を修せうずるには、人口外聞を憚るな、学文をせいで心の至るといふことは無いことぞ、我より下の者に<sup>そうきやう</sup>崇敬せられうよりも、上たる人に諫めらるゝことを喜うで交りを為せ、大事を妻に漏らすな、女は智慧浅う、無遠慮なによつて、他に漏らいて仇となるぞ、凡下のものを卑しめ<sup>あなど</sup>慢るな、却つて憐愍を加へい、これは即ち天のお憐れみを蒙る道ぞ、万事を努め行はぬ前に、心を尽いて思慮を加へい、極悪の人に異見を為すな、病眼のためには日の光が却つて<sup>あた</sup>仇にならず、病者は良薬を服して癒え、犯人は<sup>ぼんにん</sup>異見を受けて善人ともなるぞ。」

- (7) 『イソップ寓話集』(伊藤正義訳 岩波ブックサービスセンター 1995年)。該当箇所を次に示す。下線は稿者による。

息子よ、私の戒めをようく心にとめておくがいい。おまえは人間ゆえ、運命に従わなければならぬ。それゆえまず第一に神を愛せ。そして王の怒りを招かぬようにせよ。人間である以上、人事に関心を持て。悪者は神が罰してくださるからである。他人に害を加えるのはよくない。だが、おまえの敵に対しては残酷であれ。おまえの味方に対してはにこやかであれ。味方には幸福を、敵には不幸を願うべきだからである。妻には優しく話せ、彼女が他の男を求めないように。なぜなら女は非常に移り気であり、妻は夫におだてられたり優しい言葉を掛けられたりすれば、浮気をしたくなるからである。冷酷非情な者とは付き合うな。そのような者はたとえ富み榮えていても、卑しい者である。耳を塞げ。口を慎め。多弁を控えよ。他人の財産を羨むな。家族に愛されたくば、面倒を見てやれ。道理に反するこ

とをするのは恥と思え。毎日怠ることなく学べ。妻に秘密を明かすな。財産を浪費するな。なぜなら、生きている間に貧窮して乞食をするよりも、死後に財産を残すほうがいいからだ。道で会った者には笑顔で挨拶せよ。犬でさえ知っている者には尾を振って愛敬を振りまくではないか。何びとをも嘲るな。たえず知識を学べ。借金は快く全部返せ、そうすれば後で相手がおまえに喜んで貸してくれる。助けてやれる者に援助を拒むな。悪い仲間と付き合うな。友人には自分の仕事について教えよ。後で後悔するようなことはするな。逆境に出会ったら、じっと辛抱せよ。宿無しを泊めてやれ。よい言葉は罪惡の薬である。よい友人が得られる者は幸せである。なぜなら、どんな秘密もいつかばれるからである。

- (8) 『幸若舞 3』（平凡社、東洋文庫426、1983年）による。
- (9) 遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究 正編』（風間書房 1983年）371～372頁。
- (10) 『明文抄』二 帝道部（『続群書類従』第886、雑部三六）。
- (11) 『伊達本金句集』臣下事（『金句集四種集成』勉誠社文庫18、1977年）。
- (12) 注7参照。以下のキャクストン本『イソップ寓話集』引用部も同様。
- (13) 『イソポのハブラス』の序の「読誦の人へ対して書す。」には「これ真に日本の言葉稽古の為に便りとなるのみならず、善き道を人に教へ語る便りともなるべきものなり。」と書かれていて、『イソポのハブラス』がキリスト教布教の便りとしてのねらいも持っていたことが分かる。
- (14) 『明文抄』三 人事部上（注10に同じ）。
- (15) 『徒然草』第58段（『新編日本古典文学全集 44』永積安明校注・訳 小学館 1995年）。
- (16) 注6参照。以下の『イソポのハブラス』引用部も同様。
- (17) 『論語』増補版（加地伸行 講談社学術文庫 2009年）。
- (18) 『伊達本金句集』帝王事（注11に同じ）。
- (19) 『天草版金句集』23（『天草版金句集の研究』吉田澄夫 東洋文庫 1938年）。
- (20) 『ロドリゲス日本文典』（J. ロドリゲス原著 土井忠生訳註 三省堂 1955年）112頁に論語からの引用として記載されている。
- (21) 『平家物語』祇園精舎（『新編日本古典文学全集 45』市古貞治校注・訳 小学館 1994年）。
- (22) 『三略』上略（『三略』眞鍋呉夫訳 中公文庫 2004年）。
- (23) 『天草版金句集』82（注19に同じ）。
- (24) 注（9）掲載書380頁。
- (25) 注（9）掲載書384～385頁。
- (26) 『詩経』小雅、正月（『中国古典文学大系 15』目加田誠訳 平凡社 1969年）。
- (27) 観智院本『世俗諺文』上巻（『天理図書館善本叢書と書之部 57 平安詩文残篇』1984年）。
- (28) 『明文抄』一 天象部（注10に同じ）。
- (29) 『天草版金句集』197（注19に同じ）。
- (30) 『太平記』巻十九 相模次郎時行勅免事（『新編日本古典文学全集 55』長谷川端校注・訳 小学館 1996年）。

(はまだ ゆきこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学)

(指導：黒田 彰 教授)

2011年 9 月13日受理